

私が見た母の新たな一面

新見市立哲多中学校

二年 塩 見 ゆいか

今年の春、母が大きな病気にかかった。以前からある持病が悪化したからだ。長く母が病に苦しめられる姿を見てきたが、ここ数年は、特にしんどそうだった。

発作が起こると夜中に眠れないこともあったが、この数か月はさらに悪化し、痛みやしびれが続き、とにかく眠れない日は何日もあった。今までの私は、母のことが心配になりながらも睡魔に負け、横で寝てしまっていた。しかしその頃の母は、私まで眠れなくなるほど辛そうだった。それでも私は何もできず、ただ涙が出そうになるのをこらえるしかなかった。

そんな日々でも、母は仕事に休まず通っていた。私も家族も「休んで」と言ったが、母は「仕事はそんな簡単に休めない。私が一人休むと、みんなに大きなしわ寄せがいくんよ」と言い、辛い体で仕事に向かっていた。私は、不安でたまらなかった。

ある日、その不安は現実になった。母が大きな病院に入院することになったのだ。心配で心配でしかたなかった。その頃は、本当に毎日ぐっすり寝たという気がしなかった。

「母に何かあったらどうしよう」と良からぬことを考えてしまっていた。けれど、不安な気持ち以上に私は、ほっとした。それは、大きな病院で病気を治してもらえると思っていたからだ。最近では、近くの病院で点滴を受けた日には、家に帰って少しは楽そうだったが、その効果も長くは続かず、入院前頃には点滴の効果もあまり感じなかった。

入院は約三週間ほど続いた。この三週間は、私にとつてとても長く感じた。家のお手伝いをしながら学校に通う不安もあったが、それ以上に遠くの病院に入院している母のことを思うと、やはり心配でたまらなかった。

治療が進むにつれて母の顔色は明るくなり、退院する頃には、笑顔を見せてくれるようになった。久しぶりに母と一緒に食卓を囲んだとき、家の中がぱっと明るくなった気がした。健康でいてくれることが、こんなにも幸せで、家族の雰囲気も変えるのだと実感した。

この夏、私はボランティアで母の職場に行った。母が働く姿を見るのは生まれて初めてだった。そこには、家で見える母とは少し違う姿があった。てきぱきと仕事をこなし、同僚の方々と明るく会話をする母。優しく利用者の方と話をする母。本当にかっこよかった。照れくさくて、とても口に出して言えないけれど、なんだか誇らしかった。

いつも家では、私や家族の前でおもしろいことを言って笑わせてくれる、おっちょこちょいで、ちよつと心配になっってしまうような母。そんな母しか知らなかった。でも仕事

をする母は、いつもの母より何倍も何十倍も頼もしく見えた。母は、家族のためだけでなく、職場の人たちのためにも、全力でがんばっていた。

ボランティアの三日間で、私は色々な経験をし、貴重な時間を過ごすことができた。何より母の働く姿を見ることができて本当にうれしかった。三日間で何人も同僚の方が「塩見さん」「塩見さん」と母に何か聞きに行っているのを見た。その時、母が無理をしてでも仕事を続けていた理由が少し分かった気がした。職場にも家庭にも、自分を必要としてくれる人がいる。それは、とても幸せなことだと思った。

母の病氣を通して、私はいくつかのことを学んだ。まずは、家族が健康でいてくれることが家庭の明るさの土台になるということ。そして、誰かのために働くことの尊さだ。母は、病氣の辛さを抱えながらも、家庭も職場も守っていた。そんな母を私は心から尊敬している。

これからは、母だけに頼らず、私ももつともつと家事を進んで手伝いたい。家族みんなが笑顔で過ごせるように、そして母が安心して仕事ができるように支えていきたい。

将来、私が働くようになった時、家庭では明るい雰囲気を作り、職場では頼られる存在でありたい。そんな母のような、家でも仕事でも全力でがんばれる大人になることこそが、私が思い描く、理想の「明るい家庭づくり」なのだ。